E—42　青年期の子と親の情緒結合——大学生調査結果——

福岡教育大学　高橋久美子

目的　しつけや性アイデンティティの形成などの面から親子関係を明らかにした研究は多いが、親と子の自立過程で生じる問題に焦点をあてた実証研究は意外に乏しい。そこで、子が青年期に達した家族周期段階の夫婦・親子間の情緒結合における親疎性を明らかにし、親疎性に影響する要因の分析を意図して、大学生とその両親が情緒的なよりどころとして最も重要視している相手は家族内あるいは家族外の誰であるか、欲求はどの程度充足されているか、などを調べた。

方法　対象は勤務大学の1、2、3年生男子86人と女子83人及びその父親と母親。調査は学年末休暇の時期（昭和55年2月末～3月末）に行った。休暇前に調査票を学生に配布し、自宅で3者がそれぞれ記入した後返送してもらった。回収票は男子42組、女子52組。

結果　1）親子関係がうまくいっているか否かの問いに、親の9割、子の7割以上がうまくいっていると答えている。M.N.S.Sの方法を用いて測定した親の夫婦関係は全般的に良好である。2）強い愛情欲求の対象は、父親と母親ではともに配偶者が大多数を占め、配偶者志向は特に「喜び悲しみを分かつ」で高い。子では男女ともに親よりも友人・知人をあげる者が多く、子の親志向が4割を超えて最も高くなるのは「困った時頼りになってほしい」相手としてである。3）愛着の対象が家族成員か家族外の他者かで欲求充足の程度は異なる。親は友人・知人より子供、子供よりも配偶者を志向する者が大多数であるため、欲求充足率は総じて高く、情緒安定度も高いといえる。一方、子は友人・知人を志向する者が多く、全般的に欲求充足率は低く、期待はずれが大きい。